

第5章 結論

5-1 各章のまとめ

第1章では、人々のくらしや伝統的慣習に注目した環境問題へのアプローチについて概説し、人が主体的に自然環境に関わることによって自然環境は意識されていることを示した。また、人間と環境との関わりを探索対象として、水路に注目した。特に佐賀平野のクリークに注目し、現代のクリークが抱える問題に対して、人とクリークの関係の歴史的変遷という観点から取り組むことの意義および目的について示した。

第2章では、本研究で用いた手法について説明した。人とクリークとの関係を「戦前」と「現代」という歴史区分に分けて文献調査およびヒアリング調査をすることによって、それぞれの時代における関係を明らかにする方法を示した。また、DEMATEL法を用いて、クリークを中心とした環境社会システムの構造をクリークに関わる住民、市民団体、行政の人々の意識を通じて明らかにする方法について説明した。

第3章では、文献調査およびヒアリング調査の結果をもとに、戦前と現代における人とクリークとの関係について、人々のくらしや伝統的慣習の変遷という観点からその関係を明らかにした。その結果、戦前住民は、クリークと多元的な関係を持っていたことがわかった。また、人とクリークの関係が単純化している現代で、イベントによる新たな関係性が発生していることを示した。

第4章では、第3章で得た情報をもとに、DEMATEL法を用いた一対比較調査による構造分析を行ない、時代変遷による各属性の関係構造の比較分析を行なった。その結果、戦前住民は伝統的慣習などの行為によってクリークに関わっており、体験からクリークを意識していることがわかった。現代住民は、農業においてのみクリークに関わっており、住民・市民団体・行政という立場の違いによって意識が異なることがわかった。また、「泥土揚げ」を具体的な事例として、イベントによる、人とクリークとの関係の再構築の可能性について提案を試みた。

5-2 DEMATEL法について

本研究では、人とクリークとの複雑な関係構造を明らかにするために、DEMATEL法を用いた調査・分析をおこなった。その概要と得られた見解について以下にまとめる。

5-2-1 調査・分析のまとめ

- 調査項目の抽出は、文献調査と住民・市民団体・行政へのヒアリング調査によって得られた情報から項目を決定した。また、調査票の作成にあたっては、直接的な影響関係が

明らかにないと判断される項目についてはあらかじめ削除して調査票を作成した。

- 得られた結果は、属性ごとに平均化した。このとき、構造的な特徴を分かりやすくするために、個人の直接影響行列を加算した後に、各属性の人数と評価の最大値 4 を掛けたものの半数以下を切り捨てて分析した。
- 有向グラフは、クリークは多の要素すべてと強い関係性があるという前提のもと、その他の項目同士の関連性をみることによって各属性にみられる意識の違いを見ることにした。中でも特に特徴が見られる「堀干し」と「泥土揚げ」については、その項目に関連する部分を抜きだして関連図化した。

5 - 2 - 2 本研究によって得られた DEMATEL 法への所見

- DEMATEL 法による環境社会システム分析は、時間軸を交えたものも可能であることがわかった。
- DEMATEL 法の限界として、「関係あり」ということはわかるが、その「理由」まではわからない。本研究では、前もっておこなった文献とヒアリング調査からの情報により、その「理由」を考察したが、今後は、分析後に被験者へのヒアリングにて理由付けすることも必要であろう。
- 本研究では、十分に項目や記入方法についての説明をおこなったが、被験者の項目の意味の捉えかたや関係の度合いの評価が同じであったかどうかは定かではない。この理由として、現代住民に 2 通りの回答傾向がみられたという点が挙げられる。これについては、数値的な比較は各属性内でのみおこなったこと、数値ではなく最大影響度・被影響度をもちいて有向グラフ化し、各属性の比較をしたことで、その問題は解決していると考ええる。
- 以上から、今後は項目の設定と被験者の選出の検討を慎重に行なうことが重要であるということがいえる。

5 - 3 人とクリークとの関係の再構築へ向けて

5 - 3 - 1 戦前から現代へかけての人とクリークの関係の変化

3 章および 4 章より、戦前における人とクリークの関係は、産業から生活まで人のくらし全般に関わり、遊びによって関わる子供から産業や生活などによって関わる大人まで、世代を問わず関係があったことが明らかになった（図 5-1）。また、戦前においては、人とクリークとの関係を育むうえでは、先人より伝承されてきた独特な慣習や文化といった行為が媒介となって多元的な関係を有機的に結合していたこともわかった。このような行為が潤滑油のように機能しながら、農業を中心とする産業からの関わりも、生活用水の利用や

魚取りといった生活のための関わりも、あるいは祭りのような文化的な関わりもすべてが乖離して行われるのではなく、それぞれに相互関係が発生し、多元的で濃密な関係のシステムを形成していたということが言えよう。

それに対して、現代における人とクリークとの関係は、農業のための用・排水路としての役割のみが残り、その関係は単純化してしまっている（図 5-2）。現代の住民の中にはクリークを保全していきたいという意識を持っている人はいるが、具体的な行為を通しての意識というよりは、情報などから得た知識に基づく意識である。そのような知識によって、クリークの保全が必要であるということは“わかる”が、自らの生活に具体的に関係のあることとしては捉えにくいと考えられる。

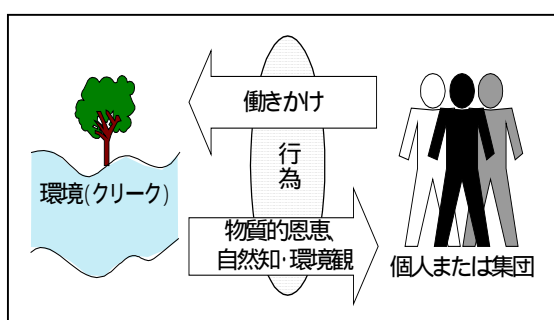


図 5-1 戦前における人とクリークとの関係

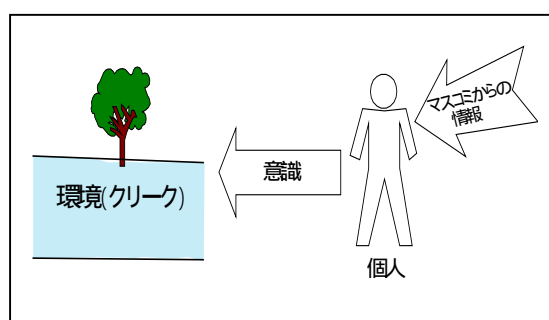


図 5-2 現代における人とクリークとの関係

5 - 3 - 2 多元的関係の再評価から新たな関係の再構築へ

戦前の多元的で濃密なシステムと、現在の一元的な人とクリークとの関係システムの差異は既に述べた通りである。現在、クリークは佐賀平野の水環境として保全や管理のあり方の再生が必要とされている。その際、戦前を良く知る人の知恵を借りてクリークと人間との関係をそのまま再現することは、現在直面している浚渫問題や生物の生息環境としての問題に対処するためには理想＝絵に描いた餅とされるかもしれない。また、社会的・経済的な変化に加え、空間（場）の変化という点からも、そのことは実現不可能である。

そこで、現在残っている農業との関係に加えてどのような関係システムがあれば、多元的な人とクリークとの関係が再構築できるだろうか。本研究では、クリークを「イベントの場」とすることで、その可能性を考える。

3 - 2 - 3 で述べたように、クリークを含めた水環境への住民の意識を高めるため、近年、体験型のイベントが盛んに行われるようになってきている。体験型のイベントにより、意識のみでクリーク保全の必要性を思っているだけではなく、実体験による関係性に得るものがあると考えられる。それは、例えば単純に水にふれるという娯楽からかもしれないし、魚を見て触り、クリークがあることの恩恵を感じるということかもしれない。また、体験イベントによっては、何か作業を共同で行なうことによって、人と人との関係が強まる可能

性も持ち得ているだろう。(図 5-3) またそのとき、4 - 4 でも述べたように、産業・食文化・遊び・祭りなどを組み合わせた、できるだけ多面的な関係を持つべきである。

現代におけるクリークの問題は、人とクリークとの関係が個人的で単一的なものになったことから発生したと考えられる。そのため、イベントにおける再現により、戦前の関係で示したような、多面的で重層的な、また、集団的な関わりを生成することができれば、解決に近づくと考えられる。この集団的な関わりが重要なのは、現代では、多様な立場や意識をもつ人々が互いの立場や意見を尊重し合いながら、クリークの保全というひとつの問題に関わっていくことが必要であるためである。

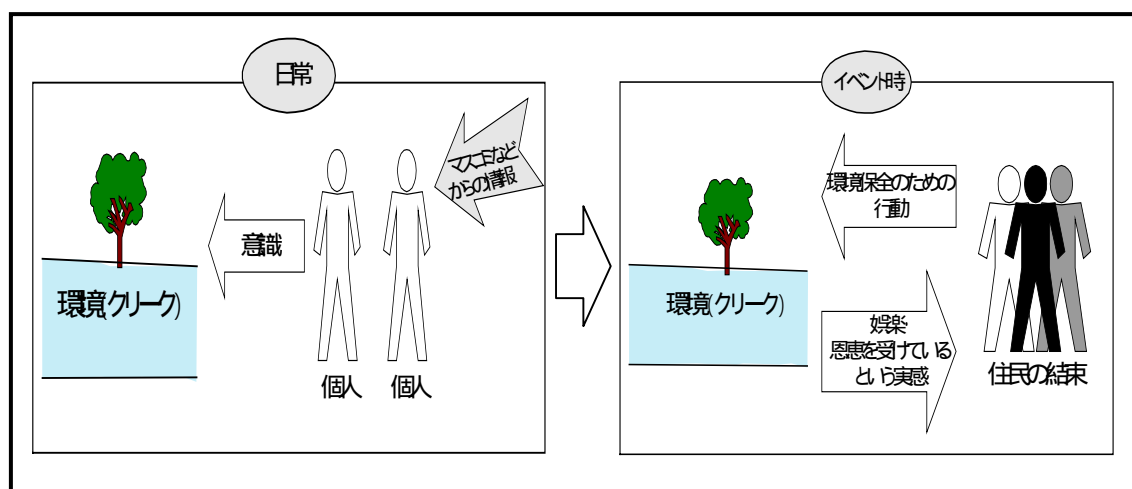


図 5-3 イベントによる関係性の变化

人と人との関わりという点から考えると、例えば、都市と農村との交流イベントで、広域的に人と人とのつながりをつくることができ、幅広い人々がクリークの保全に関わることができると考えられる。都市住民が農村部に来訪しクリークや農村の人々とふれあうことで、都市住民はクリークに遊び場や自然とふれあう場としての価値を感じ、貴重な水環境としてクリークを尊重する。一方で、地元住民は来訪者によって経済的利益も得られることに加え、自分の地域の誇りを感じることで、クリークに再度目をむけ、価値のある水環境として認識することができのではないだろうか。(図 5-4) このことによって、地元住民と来訪者の両者に得るものがあるうえで、クリークを保全し、且つ活用していくことができると考える。

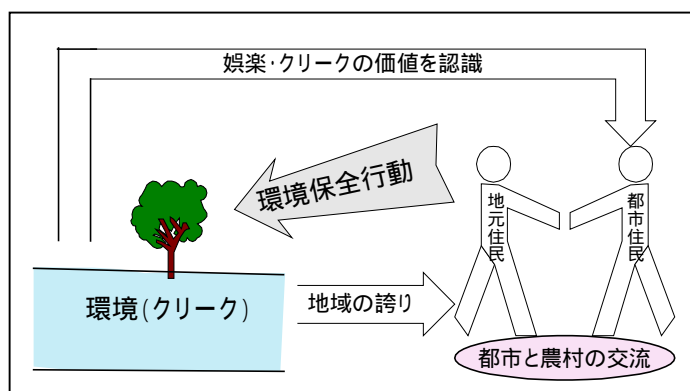


図 5-4 都市と農村の交流による関係

5-3-3 地域の水環境としてのクリーク

現在クリークは、再び変革期を迎えようとしている。人から管理され、関係を持つことによって継続してきたクリークのシステムは、現代の生活・農業様式の変化と開発事業等によってその関係性が断片化したため、さまざまな問題が浮き彫りとなって浮上している。

人との関わりを源とするこのような問題を解決するためには、単に技術や法制度による規制を実施することにはあまり意味がない。人々がどのようにクリークに関わってきたかということ認識し、これからどのように関わっていくべきなのかを計画しなければならない。

現代のクリーク問題が語られるときには、しばしば「クリークの統廃合」や「圃場整備」といった公共事業や農家による農薬・肥料の大量投入に対して批判される場合が多い。「クリークの統廃合」や「圃場整備」により、人がクリークに近づくにくくなったことが人とクリークの関係希薄化させ、農業の効率性を求めてクリークを直線的にしたことが生態系の変化に一役かったことは否めない。しかし、公共事業が水不足の解決や農業の効率化といった点で多大な効果があったことも認めなければならない。また、今まで農家のみにクリーク管理を押しつけてきた責任も忘れてはならない。

現代は、社会組織や産業、生活など様々な面で戦前に比べて社会が多様化している。そのような中では、「農業」や「生物」などといった、ある一つの観点からのみ議論に終始することは、人とクリーク関係を、重層的で他の要素とも関係を持っている(図5-5)ことを忘れ、単に複数の一元的な関係(図5-6)として扱うことになってしまう。それらすべての問題を合わせて考え、クリークへ働きかけていくことが、農家を含めた住民、市民団体、行政、そして佐賀平野のみならず、県民から都市部住民に及ぶまでに必要なのである。

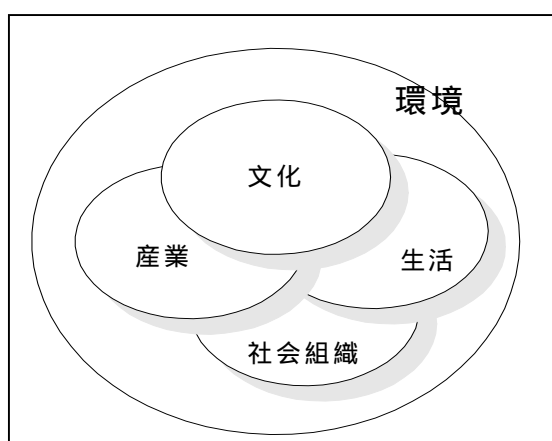


図5-5 多元的で重層的な関係

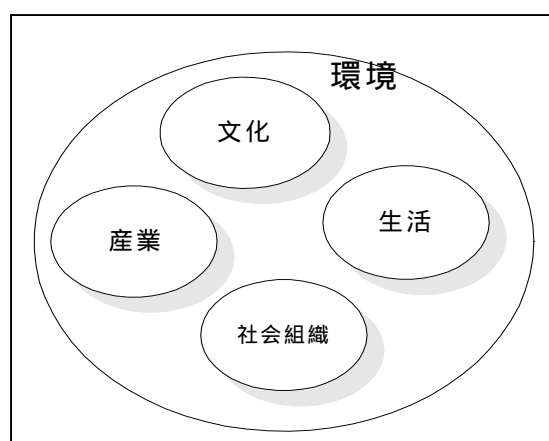


図5-6 一元的で複数の関係

5 - 3 - 4 人間活動からみた環境問題

戦前における人とクリークとの関係に基づき、今後の新たな関係再構築の可能性を述べてきた。先人達のくらしや歴史、受け継いだ民俗事象があって今があるというのはどこの地域も同じで、地域環境問題として取り組むことができる。地域の持つ生産・生活・文化などの多様性を知り、直接自らの生活に関わりのある地域環境に取り組むことから始めるべきである。

5 - 4 今後の課題

本研究では、人とクリークとの関係の多元的な関わり合いの必要性と、今後のイベントの場としてのクリーク、そのテーマとして伝統的慣習における多元的関係のあり方をヒントとすることを提案した。

今後の課題としては、イベントによって一時的に再構築された多元的で重層的な関係が継続可能かどうかについて、具体的な事例をとりあげて考察をすることである。

今回は農業者・市民団体・行政といったクリークへの関係者を調査対象としたが、例えば県外からの観光客の意識も関係構造への参加主体として捉えることが必要であろう。また、クリーク地帯の中でも市街地や農村といった地域性の差異を加味した考察が必要である。

参考文献